

# 課題名 戦略的な茶産地の育成 ～天敵を利用したチャトゲコナジラミの密度抑制～

所属名 : 始良・伊佐地域振興局農政普及課  
発表者名 : 當 直樹

## <活動事例の要旨>

茶の新たな侵入害虫チャトゲコナジラミに対し、カンキツの害虫ミカントゲコナジラミの被害軽減に成果のある天敵シルベストリコバチを活用した密度抑制に取り組み、29年度末には霧島市牧園地区で、10～25%の寄生率となり、被害が軽減した。

## 1 計画された活動の課題・目標と策定過程

### (1) 課題・目標と設定理由、及び活動の内容と方法

近年、海外での健康志向の高まりから、本県では米国など海外への輸出茶生産への取組が増加する中、始良・伊佐地区では有機栽培やI P M等環境に配慮した生産が拡大している。そこで、新たな侵入害虫チャトゲコナジラミ（以下「チャトゲ」という。）の被害を軽減するため、天敵の活用について取り組んだ。

### (2) 計画の策定過程

#### ア チャトゲコナジラミの侵入確認

チャトゲは、我が国では平成16年に京都府で、鹿児島県では平成24年に屋久島で確認され、始良地区でも平成27年3月に霧島市牧園町弓張で初めて確認された。また、幼虫が排出する甘露には、葉を黒く覆う「すす病」が発生する。

#### イ 対策会および侵入警戒調査

発生確認を受け、生産者代表、指導者等関係者による対策会議で対応を協議し、生産者に対し適宜情報を提供すると共に、発生園での発生消長調査を行い、適期の薬剤散布や、整枝による寄生葉除去（耕種的防除）を指導した。しかし、発生を拡大を抑えることはできず、29年春期の侵入警戒調査で管内ほとんどの地域で発生を確認した。

#### ウ 天敵の導入

コナジラミ類の天敵シルベストリコバチ（以下「天敵」という。）は、カンキツでミカントゲコナジラミの被害が大きな問題であった1925年に中国から導入され、被害軽減に成功している。しかし、この天敵は県内のチャトゲ発生園及び経済栽培カンキツ園では確認されず、南九州市知覧の民家と鹿児島大学の学内ほ場で確認されていた。

先にチャトゲが発生していたさつま町では、平成27年から、鹿児島大学の果樹園にチャトゲを寄生させた茶苗木を持ち込んで天敵を産卵・寄生させ、地元の茶園での増殖を試み、翌年にはチャトゲの発生が減少した。

この結果を踏まえ、有機栽培茶園の多い始良地区でも、天敵をチャトゲ発生園へ放飼し、定着及び増殖によるチャトゲの密度抑制技術の確立に取り組むことになった。



写真1 チャトゲコナジラミ  
(左：成虫 右：幼虫)



写真2 すず病が発生した  
茶園



写真3 シルベストリコバチ  
(左：雄 右：雌)

## 2 普及活動の内容

### (1) 活動の経過

ア 先進地視察、茶鉢の準備（平成27年度）

地区振興会指導班で、先に天敵導入を進めているさつま町を視察。チャトゲ接種茶樹用茶鉢を準備し、発生園に置いた。

イ 発生消長調査（平成27年度～）

発生園に黄色粘着板を設置し、週1～3回収、計数し、発生消長を調査。

ウ 情報の提供（平成27年度～）

発生消長をもとに防除情報を作成し生産者、関係機関に提供

エ 天敵の導入（平成28年度～）

発生消長調査の結果を基に発生園で、チャトゲが産卵した茶鉢を鹿児島大学果樹園（29年度7月はさつま町）に移動し、天敵を寄生させた後、実証ほ（牧園町弓張、中津川）に持ち帰り天敵を導入。

また、29年7月からは苗木での放飼は、苗木生産などに時間と労力を要することから、天敵が寄生している葉（枝）を採集し、発生園に置く簡易な手法についても検討し、すでに天敵が定着したさつま町の茶園から枝を持ち帰った。

オ 効果確認調査（平成28年度～）

発生園からチャトゲの付着した茶葉を採取し、実体顕微鏡で天敵の寄生状況を計数。

### (2) 指導・支援の体制

鹿児島大学、農業開発総合センター茶業部の指導のもと、有機栽培生産者の組織「Oty鹿児島club～おいしい有機茶を追求する若者達の会～」を中心に地元生産者、および管内各市町、農協、振興局で構成する地区茶業振興会指導班会で、一丸となり取り組んだ。

## 3 普及活動の成果

### (1) 課題及び目標の達成状況とその要因

平成28年9月の調査では、天敵の寄生率1.2%で、中津川の実証ほで、第四世代が約4万頭、翌29年の越冬世代が約2.5万頭発生した。しかし、6月の調査で寄生率が、弓張で27.6%、中津川で18.6%となり、第一世代以後は、弓張は各世代千頭程度、中津川では数頭程度で推移し、すす病の発生も確認されなくなった。牧園地区では9月と10月の調査で、10～25%の寄生率となり天敵が定着したと思われる。

### (2) 活動に対する生産者・農家の評価

Otyクラブの会員から、「酷かったのは1年だけだった。」「全然気にならなくなった。」との感想を得た。

### (3) 地域農業振興への貢献

管内各市町、農協、振興局で構成する地区茶業振興会指導班会では、11月に平成30年度地区茶園管理暦を天敵保護体系に見直した。

今回の実証結果は、有機栽培技術やIPM技術として活用が見込まれ、農薬費の削減も期待される。当地区は、有機栽培の生産者が多く、輸出や有機てん茶への取り組みが進んでおり、地域への貢献は大きいと思われる。

## 4 今後の普及活動に向けて

### (1) 今後の課題

農業開発総合センター茶業部環境研究室によると、天敵として期待できるのは現地での寄生率10%以上ということであり、牧園町ではほぼ目的を達したと思われる。

次年度は溝辺地区を中心に他地区への導入拡大とともに、定着した天敵の保護を図る。

### (2) 今後の活用に向けて

天敵利用による、害虫の密度抑制は、有機茶や輸出向け茶の生産に貢献できる。

引き続き生産者と関係機関・団体が連携し、茶業経営向上のための技術確立に取り組んでいく。